Pick up! THEATRE EAST

東京演劇道場 第二回公演「わが町」

原作：ソーントン・ワイルダー　構成・演出・翻訳：柴幸男

Tokyo Theatre DōJō 2nd performance “Our Town”

道場生の23人と、“東京”を立ち上げる

東京演劇道場第2回公演が行われる。演出を務めるのはままごとの柴幸男。
ソーントン・ワイルダーの戯曲「わが町」に想を得た作品に挑む。

2019年に活動をスタートした東京演劇道場は、芸術監督の野田秀樹が“師範”となり、さまざまな演劇人と出会うために立ち上げたプロジェクトだ。2020年、野田自身の作・演出により4チーム制で上演された第1回公演「赤鬼」は好評を博した。そして2022年に新たな顔ぶれも加わった道場生たちが第2回公演を行う。演出を任されたのは柴幸男だ。

「道場公演の演出を、というお話をいただいたとき、まずは野田さんが道場に対してどんな展望を持っているのか知りたいと思い、お話しさせてもらったんです。そのとき野田さんは、道場から新たな流れや化学変化が起きることを期待されているのではないかと感じました。ただ道場生は出自も方向性もさまざまなので、共通するのは東京芸術劇場に集う俳優ってことじゃないかなと。それで“東京”をスタートラインに考えることにしました。でも東京を題材にした小説やマンガなどを読んでもピンとくるものがなく、それなら逆に東京の要素がまったくない戯曲で東京を立ち上がらせようと思って“街”に注目した『わが町』を思い出しました」

東京を焦点に、と思った背景には、現在、東京と北海道の2拠点生活をしている柴自身の状況にも関係があるのだろうか。

「あると思います。これまでも何度か東京を描きたいと思っていたのですが難しくて。それは自分が東京の内部にいるからじゃないかと感じていたんです。でも東京に入る / 出るを繰り返すようになって、東京を題材として扱いやすそうだなと感じたところはありました」

また活動初期の柴は、「わが町」に想を得た代表作「わが星」（2009年）をはじめ、「ロング・クリスマス・ディナー」（2010年）、市民劇「わが町可児」（2011年）など、ワイルダー作品に強い関心を示していた。しかし今回は、その頃とは少し思いが異なるようだ。

「ワイルダーは、ドラマチックさを目指さず平凡なセリフやシーンを描き、またできるだけ観客に感情移入させないように、次々とシーンを展開させていきます。そういったワイルダーの演劇観に影響を受けた時期もありましたが、今の自分の意識はもっと別のところにあって。今は、人間が人間を演じる前提でやらなくてもいいんじゃないかと思うようになりました。また1つの役をシェアしたり、舞台上に居ない人を居るように感じさせたり……台本に書かれていなくてもその時々のメンバーで台本の立ち上げ方を一から考えればいいんだと思ったら、演劇がもっと自由に作れる感覚になりました」

道場生たちにとっては、非常にやりがいのある公演になりそうだ。

「メンバーは、道場生の中からオーディションで選ばせてもらったんですが、お話しをしてピンときた人を選んだら、偶然23人でした。東京（23区）を舞台に23人ってちょっとマッチしすぎな気もしますが（笑）、アプローチの仕方も含め、みんなで一から考えていこうと思っています」

取材・文：凛（演劇ライター）

©芸劇撮影

1月25日㊌～2月8日㊌
シアターイースト
詳細はP8,10へ

原作：ソーントン・ワイルダー
構成・演出・翻訳：柴幸男（ままごと）
翻訳協力：水谷八也
出演：東京演劇道場生

Pick up! THEATRE EAST&WEST

芸劇レパートリー

まつもと市民芸術館「博士の愛した数式」
北九州芸術劇場「君といつまでも～Re:北九州の記憶～」
宮崎県立芸術劇場「新 かぼちゃといもがら物語」#7「神舞の庭」

Geigeki Repertoire

三都市三様・地域の豊かさが育む創造の世界

年度末は各地の公立文化施設が満を持してオリジナル作品を発表する季節。
松本、北九州、宮崎の三都市から届けられる充実の三作品を紹介しよう。

2023年2、3月は、地域発の三作品が現地での上演後、シアターイースト＆ウエストにやってくる。

50歳差のタッグは著名小説の舞台化

一番手は、まつもと市民芸術館制作による作家・小川洋子の代表作の一つで06年には映画化もされた『博士の愛した数式』。同館の総監督・串田和美は原作を一読以来、交通事故の後遺症で80分しか記憶がもたなくなった元数学者の「博士」に心惹かれており、今回待望の博士役を演じる。演出は、50歳超年若い気鋭の劇作家・演出家である劇団太組の加藤拓也。共演は安藤聖、井上小百合に加え、串田の呼びかけから松本拠点で活動する劇団TCアルプの近藤隼、草光純太。そして青年座の増子倭文江と腕利きぞろいの5名。15年に自劇団でも『博士の～』を上演した加藤が、新たにめざす創作に期待が募る。

地域の人と「記憶」をアーカイヴする

北九州芸術劇場では北九州市市制50周年を迎えた2012年度から、地域で長く暮らしてきた高齢者の方々に劇作家が聞き取りをし、それら「記憶」を戯曲化して地域の演劇人により上演する『Re:北九州の記憶』を制作してきた。10年間で73名の方に協力いただき、できた短編戯曲は89作品。過酷な戦争体験からドキドキのお見合い話、シュールで謎めいたエピソードなどが並び、カラフルで何度観劇しても新鮮に味わえる。11回目の今回は節目として『君といつまでも～ Re:北九州の記憶～』のタイトルに。これまでも同作品で構成と演出を手掛けてきた大阪の劇団南河内万歳一座の内藤裕敬が、アーカイヴしてきた“市井の人々の記憶の物語”に、歴史的エピソードや地域性を織り交ぜた新作を執筆・演出する。東京に居ながら特濃の北九州体験ができる特別な舞台、絶対に観逃せない。

受け継がれる祭祀と家族の物語

宮崎の風土とそこに暮らす人々の生活に、現代の地域社会が抱える課題を重ねた戯曲の執筆から始まる、宮崎県立芸術劇場「新 かぼちゃといもがら物語」は今年で第7弾。その戯曲を、九州の人材と知名度の高い全国区の俳優による混成チームを率いた、劇場の演劇ディレクターが演出する。18年初演、20年に現演劇ディレクター・立山ひろみによる新演出版が創られた『神舞の庭』（長田育恵 作）は、宮崎山間部で古くから神楽を受け継ぐ家族のドラマに、過疎や都市部と地域の乖離などを重ねて描く秀作だ。20年も東京公演が予定されていたが、感染症禍のため中止になっており、今回の東京公演にはさらなる熱が注がれるはず。前回から続投の大沢健、東風万智子と宮崎＆地域の俳優陣が溶け合う座組が醸す「土地の物語」をじっくり味わいたい。

独自の風土や風習、祭礼、様々な歴史的遺物・遺産など、地域は都市部とはまた違った創作のための題材の宝庫だ。そこに各文化施設が育ててきた、人材や事業の蓄積が加わることで多彩な創作が枝葉を広げていく。史跡や名所をめぐるように、地域発の舞台作品を通して土地と人を知る演劇的トリップを、東京芸術劇場で是非体験してほしい。

文：尾上そら（ライター）

まつもと市民芸術館
「博士の愛した数式」
2月19日㊐～26日㊐
シアターウエスト 詳細はP10へ

原作：小川洋子『博士の愛した数式』（新潮文庫刊）
脚本・演出：加藤拓也

まつもと公演　2月11日㊏～16日㊍
https://www.mpac.jp/

©清水明男

北九州芸術劇場＋市民共同創作劇
「君といつまでも～Re: 北九州の記憶～」
3月3日㊎～5日㊐
シアターイースト 詳細はP12へ

脚本・構成・演出：内藤裕敬（南河内万歳一座）

北九州公演　2月23日㊍㊗～26日㊐
http://q-geki.jp/

「神舞の庭」（2020年）©黒木麗子

宮崎県立芸術劇場
「新 かぼちゃといもがら物語」#7
「神舞の庭」
3月11日㊏～12日㊐
シアターウエスト 詳細はP12へ

作：長田育恵　演出：立山ひろみ

宮崎公演　3月1日㊌～5日㊐
https://miyazaki-ac.jp/

＊新型コロナウイルス感染症にかかわる諸般の事情により、掲載情報に変更がでる場合がございます。最新情報は、東京芸術劇場ホームページ等でご確認ください。